

時代を読み解く

シリーズ 36

SNSで世界拡散 TikTok戦争

2022年9月以降のロシアのウクライナ侵略（ウクライナ戦争）は「First Tiktok War」とも呼ばれる。TikTokやTelegramなど、個人のスマートフォンで利用可能な

クライナ戦争）は「First Tiktok War」とも呼ばれる。SNSから、現地の映像や音声を含む情報が全世界に配信されてきたからだ。これらSNS上の情報のほか、商用衛星画像、政府

「OSINT」とは何を意味するか。しかし、俗に「情報革命」と呼ばれる、ICTの拡散と高度化が進む2000年以降の世界での「OSINT」の諸相は、次の3つの理由から少し複雑だ。第1に、OSINTが想定する公開情報の「質」と「量」の変化だ。近年のOSINTをめぐる主たる論議やNGOに属する在野の機関」と形容したことだ

情報革命と揺らぐ「OSINT」の諸相

情報機関の職人芸とネット探偵達の集合知の交錯？

防省（DOD）が『国防省OSINT戦略2024ー2028』を、今年3月に米国国家情報長官室（ONDI）が『インテリジェンス・コミュニティOSINT戦略2024ー2026』を公表したように、OSINTは引き続き政府の属さない「在野」のアクタにも開かれてきた。例えば、冒頭に紹介した



今月の講師 瀬戸 崇志氏

防衛研究所 政策研究部
サイバー安全保障研究室 研究員

1993（平成5）年生まれ、神奈川県出身。慶応義塾大学法学部卒業、東京大学公共政策大学院専門職学位課程修了。2021年から防衛研究所勤務。専門はサイバー・情報領域を巡る安全保障。最近の主な業績として「民主主義国家の『サイバー軍』による攻勢的サイバー作戦能力の整備と運用」（『安全保障戦略研究』第4巻第2号、24年3月）、「パブリックアトリビューションの拡散と多様化」（同第3巻第2号、23年3月）、「ロシアのウクライナ侵攻と米英両国のインテリジェンス公表政策」（NIDSコメンタリー、22年5月）などがある。

「OSINT（オシント）」が極めて重要な役割を果たした戦争とも論じられる。普通の人の為の情報機関とは？

OSINTの活用例は、ロシア政府からすれば、民間企業やNGOの手で自国の軍事行動や秘密工作が暴露された事実だ。こうした運用保全（OPSEC）のリスクの管理は、米国の同盟・同志国にとっても無視し得ない問題となる。また「戦場のスモッグ（fog of war）」と呼ばれる懸念もある。在野でのOSINTが、政府の情報機関などで十分な専門的訓練を受けていないアマチュアの手で扱われることで、結果的に偽情報や誤情報の拡散などの促進を助けてしまう問題だ。同時に、防衛情報当局による、今日のOSINTがもたらす社会の活用にも、いくつかの政策課題がある。

1つは「機密情報」重視の組織文化などの独特な官僚的障壁が数多ある情報機関内で、いかに「公開情報」での情報収集・分析手法の強化を図るかだ。前述のD

テーマをさらに深掘り
「防研セミナーブリーフィング」

執筆者の瀬戸研究員が今回のテーマをさらに深掘りして解説し、防衛省職員と突っ込んだ議論を行う「防研セミナーブリーフィング」が1月20日（月）午後3時～4時まで、市ヶ谷のF1棟6階「国際会議場」で開かれます。参加者・聴講者は隊員に限定します。ご興味ある方は奮ってご参加ください。▽問い合わせ＝防研企画調整課03-3268-3111（内線29177）まで。